

## 焼岳の火山活動解説資料（令和8年2月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

山頂付近を震源とする微小な火山性地震が1月25日から増加しましたが、その後少ない状況が続いています。火山活動は地震増加前の状態に戻り、想定火口域から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、3月4日（期間外）14時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。また、山頂付近の微小な地震活動は継続しており、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられることから、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、今後の火山活動の推移に注意が必要です。

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

### ○ 活動概況

#### ・地震の発生状況（図1-②③、図2、図6-④⑤、図9～11）

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が1月25日に増加しましたが、その後少ない状況が続いています。

火山性微動は観測されていません。

#### 【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に推移しました。

#### ・噴気など表面現象の状況（図1-①、図3～5、図6-①～③、図12）

24日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、前回（1月26日）の観測に引き続き、北峰南側噴気孔及び隠居穴噴気孔等で噴気が認められましたが、噴気の状態に特段の変化は認められませんでした。また、山頂付近では新たな噴気や噴出物の痕跡は認められませんでした。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも100m以下で経過しています。

#### ・地殻変動の状況（図1-④～⑥、図7～9）

傾斜計による観測では、1月25日及び27日に山体浅部の膨張を示唆する山頂方向上がりのわずかな変動が観測されましたが、その後火山活動によるとみられる変動は認められません。

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年3月分）は令和8年4月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

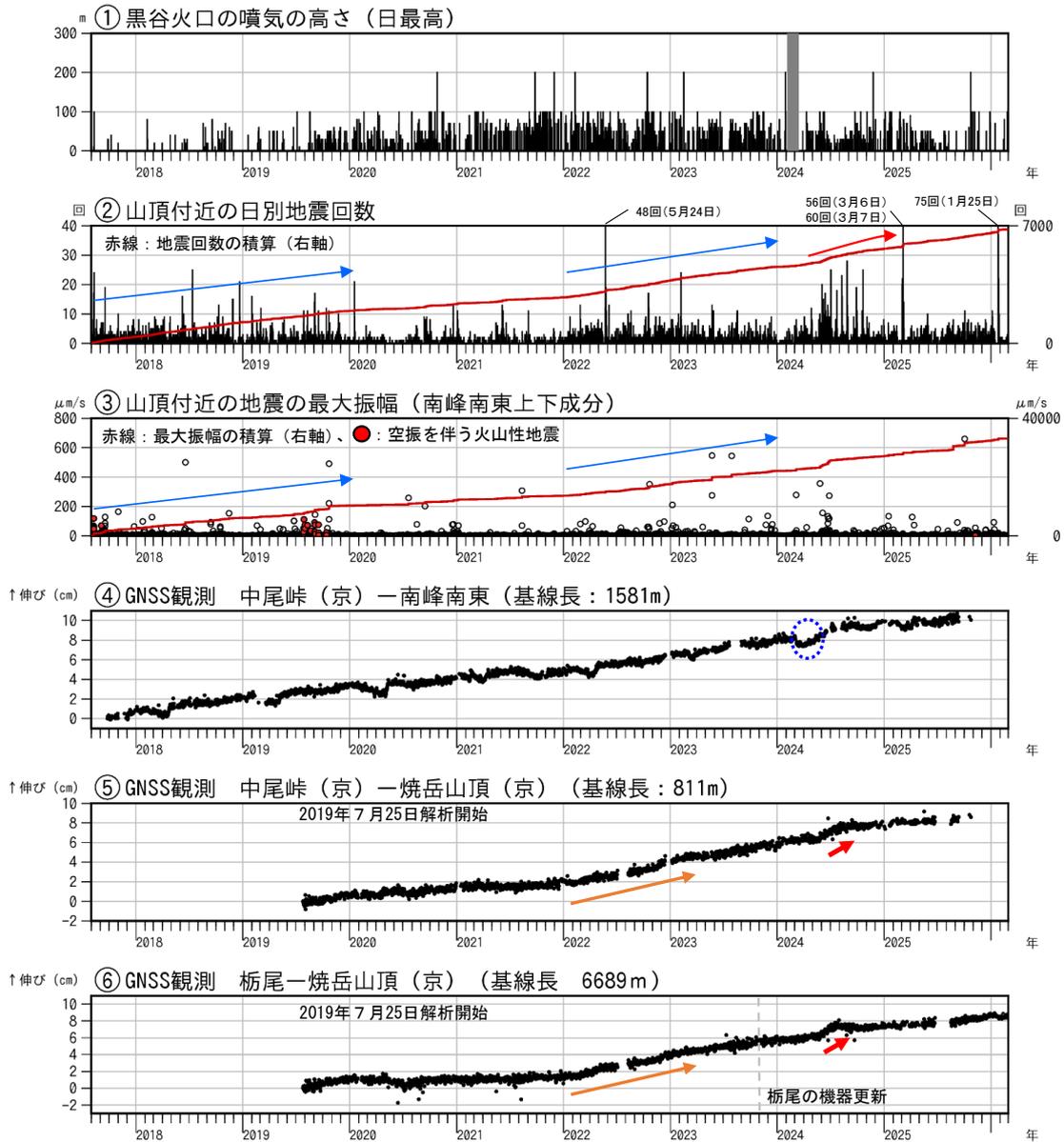


図1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2026年2月28日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅  $1.0 \mu\text{m/s}$  以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図2も参照。

① 灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示します。

④⑤⑥は図8の基線⑥⑧③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。

④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

- ・ 黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていました。
- ・ 山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています（②）。
- ・ 2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。2024年5月下旬から2025年3月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。2026年1月下旬に、一時的に地震回数の増加がみられました。
- ・ 山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤⑥）。
- ・ ⑤⑥の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。

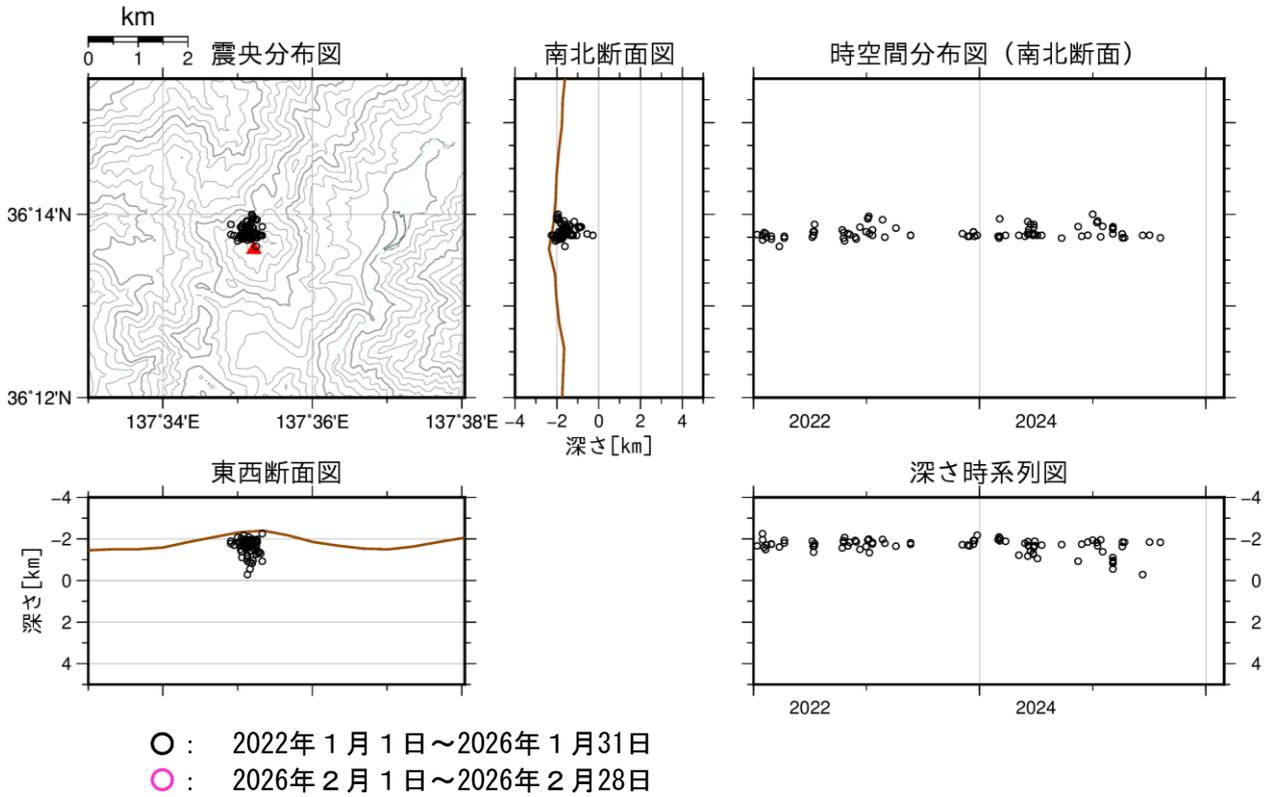


図2 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2026年2月28日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0 km以浅が震源と推定される地震のことです。

観測点の稼動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

- ・ 震源は、山頂付近の深さ0 km（海拔0 km）以浅に分布しています。
- ・ 今期間、震源が求まる地震はありませんでした。



図3 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況

（上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ）

・噴気活動に特段の変化はありません。

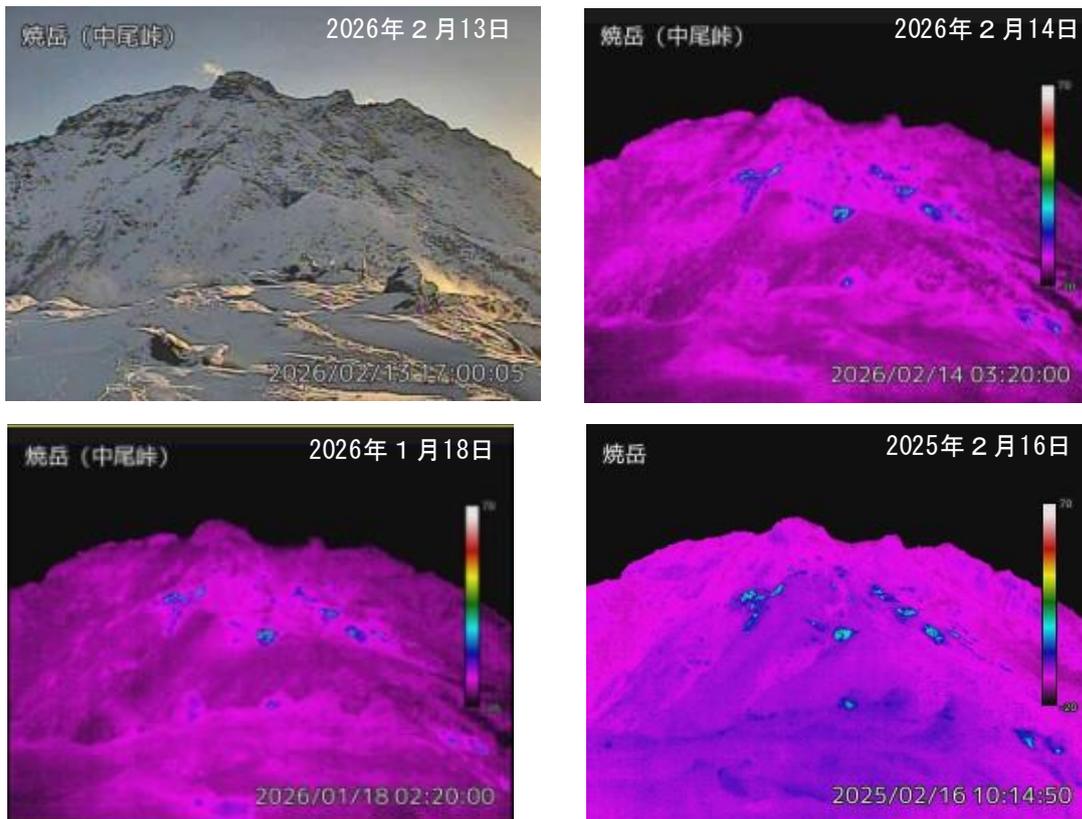


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像

撮影場所と撮影方向は図12を参照。

・前月（左下図）及び前年（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。



2026年2月24日



2026年1月26日

図5-1 焼岳 山頂付近（北峰）の噴気の状態  
撮影方向は図12参照。



2026年2月24日



2026年1月26日

図5-2 焼岳 山頂付近（隠居穴）の噴気の状態  
撮影方向は図12参照。

- ・24日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、前回（2026年1月26日）の観測に引き続き、北峰南側噴気孔及び隠居穴噴気孔で噴気が認められましたが、噴気や噴気孔周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



2026年2月24日



2026年1月26日

図5-3 焼岳 黒谷火口周辺の状況

撮影方向は図12参照。

- ・黒谷火口では噴気は認められませんでした。前回（2026年1月26日）の観測と比較して、黒谷火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



2026年2月24日

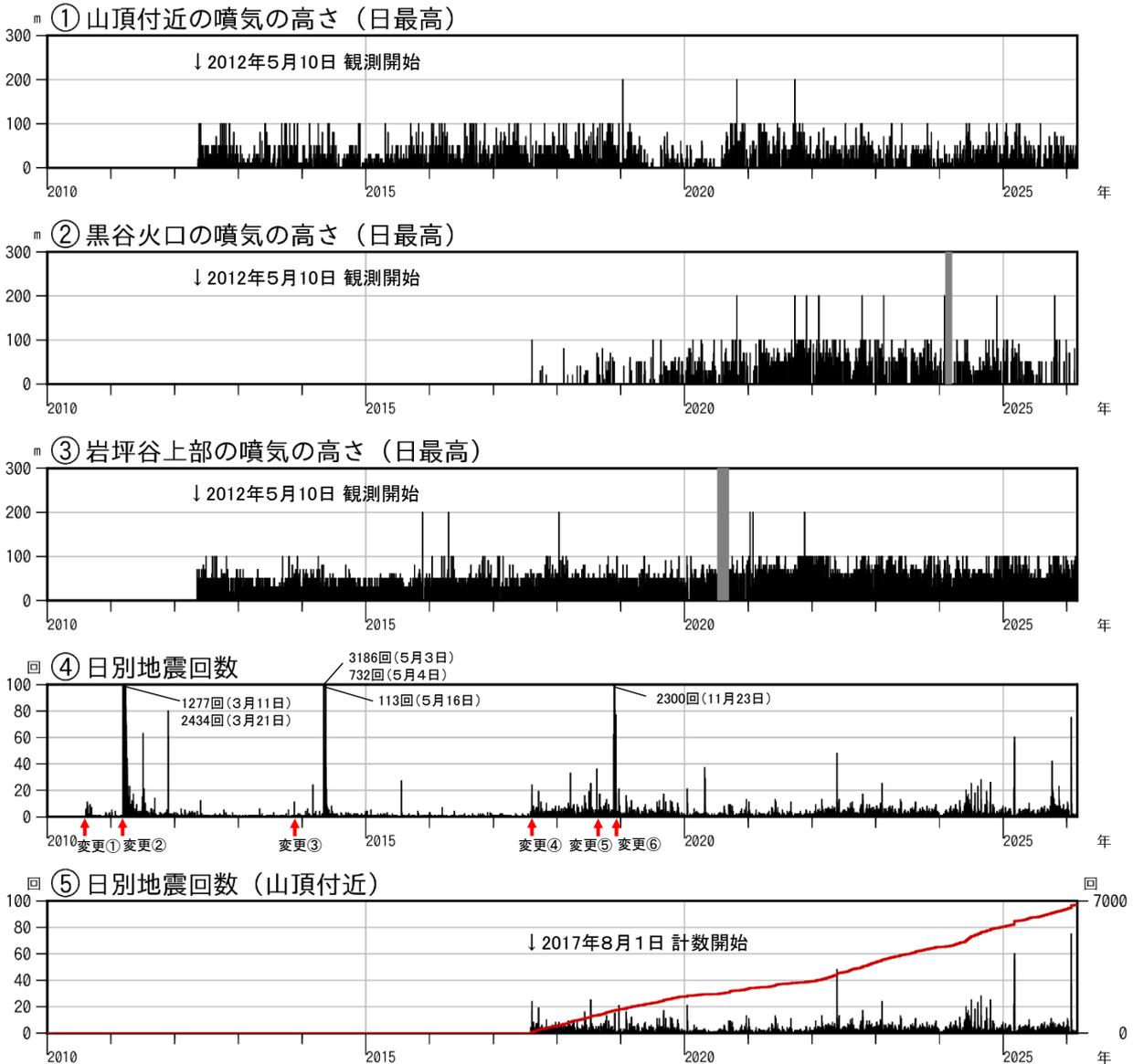


2025年3月14日

図5-4 焼岳 岩坪谷の状況

撮影方向は図12参照。

- ・岩坪谷噴気孔では引き続き噴気が認められました。前回（2025年3月14日）の観測と比較して、岩坪谷噴気孔周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



【地震の計数基準の変遷】

開始	2010年8月2日～2010年9月21日	中尾上下動振幅 $0.5\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間2.0秒以内	
変更①	2010年9月22日～2011年3月10日	中尾上下動振幅 $0.5\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内	
変更②	2011年3月11日～2013年9月30日	中尾上下動振幅 $3.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内	
変更③	2013年10月1日～2017年7月31日	中尾上下動振幅 $2.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内	
		<b>山頂付近の地震</b> (山頂付近が震源と推定される地震のうち、以下の基準を満たす地震)	<b>山頂付近以外の地震</b> (山頂付近以外が震源と推定される地震のうち、以下の基準を満たす地震)
変更④	2017年8月1日～2018年7月31日	中尾上下動振幅 $2.0\mu\text{m/s}$ 以上及び南峰南東上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.0秒以内	中尾上下動振幅 $2.0\mu\text{m/s}$ 以上及び南峰南東上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.0秒以内
変更⑤	2018年8月1日～2018年11月23日	南峰南東上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.0秒以内	南峰南東上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.0秒以内
変更⑥	2018年11月24日～		南峰南東上下動振幅 $30\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.0秒以内

図6 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2026年2月28日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

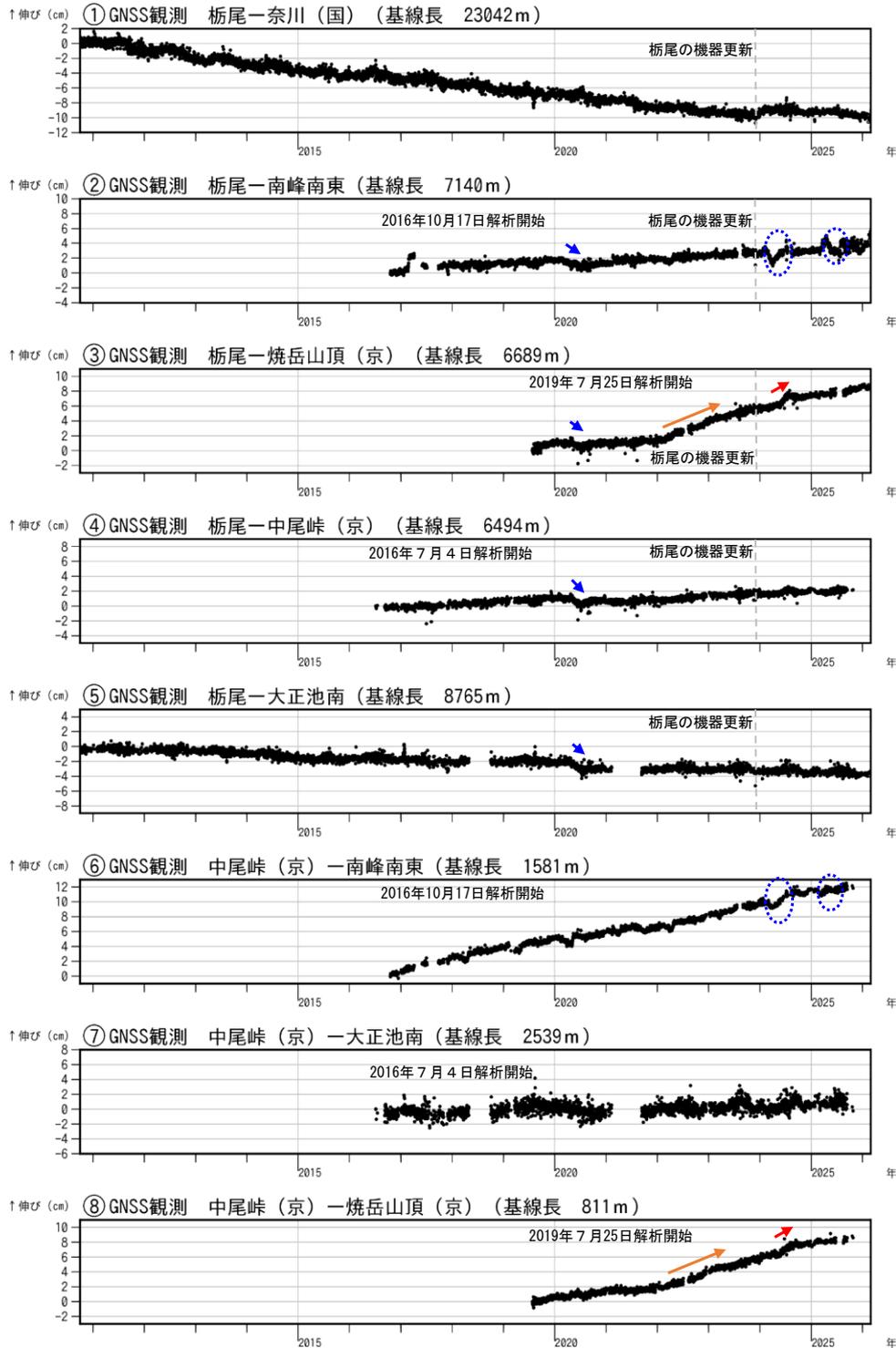


図7 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2026年2月28日）

- ・③⑥⑧の基線では、長期的には山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から2020年7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ 図7の説明）

図8のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。

2023年10月17日の栃尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

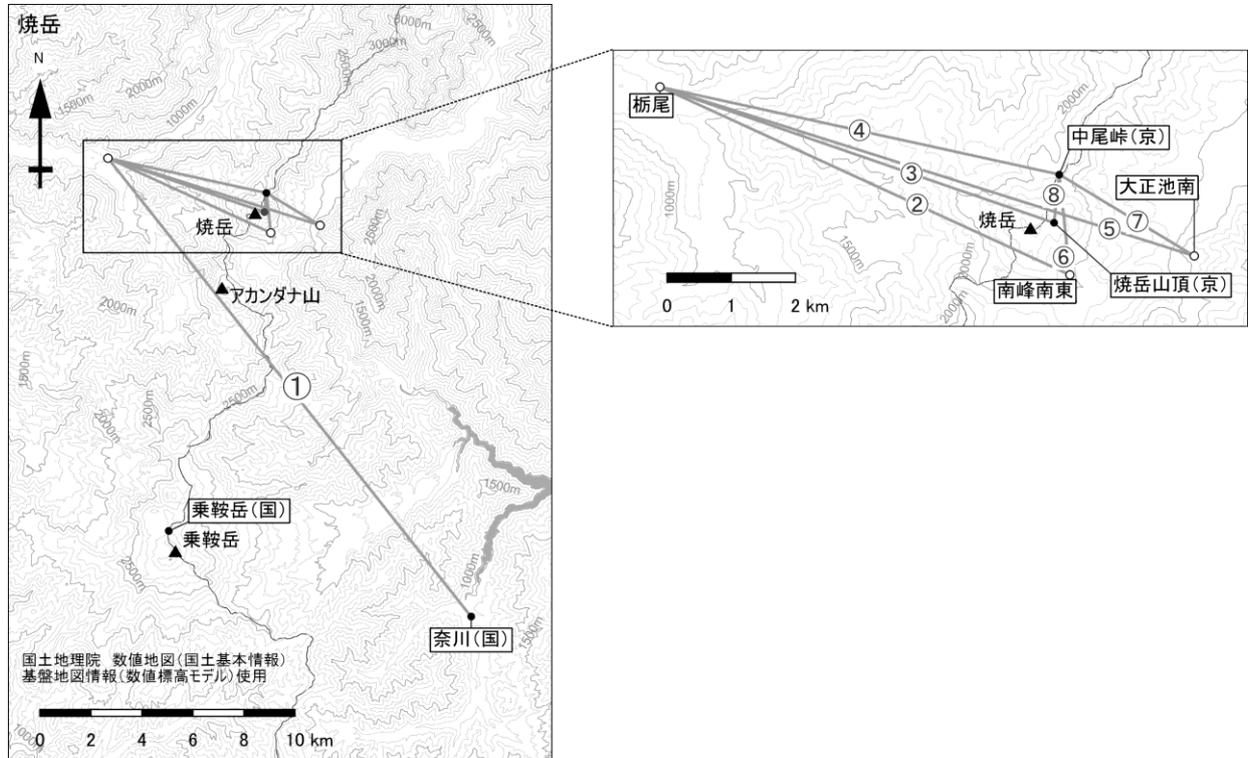


図8 焼岳 GNSS連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図7のGNSS基線①～⑧に対応しています。③⑥⑧は図1のGNSS基線⑥④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学

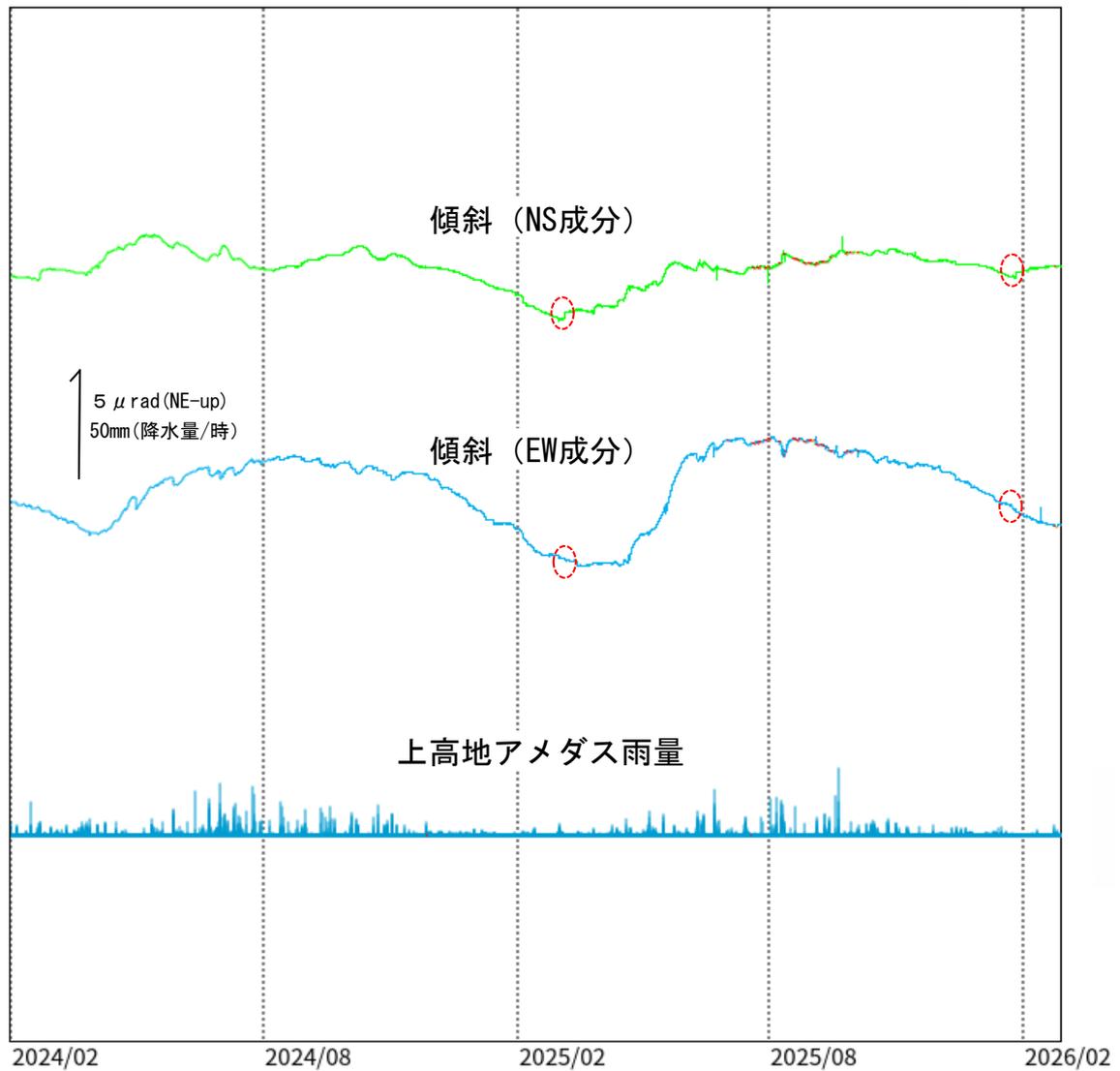


図9 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ及び日別地震回数  
 (2024年2月1日~2026年2月28日)  
 赤線部分は欠測を示します。

- ・傾斜計による観測では、2025年3月8日、2026年1月25日及び1月27日に山頂方向上がりを示すわずかな傾斜変動（赤破線）が認められました。その他の期間は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

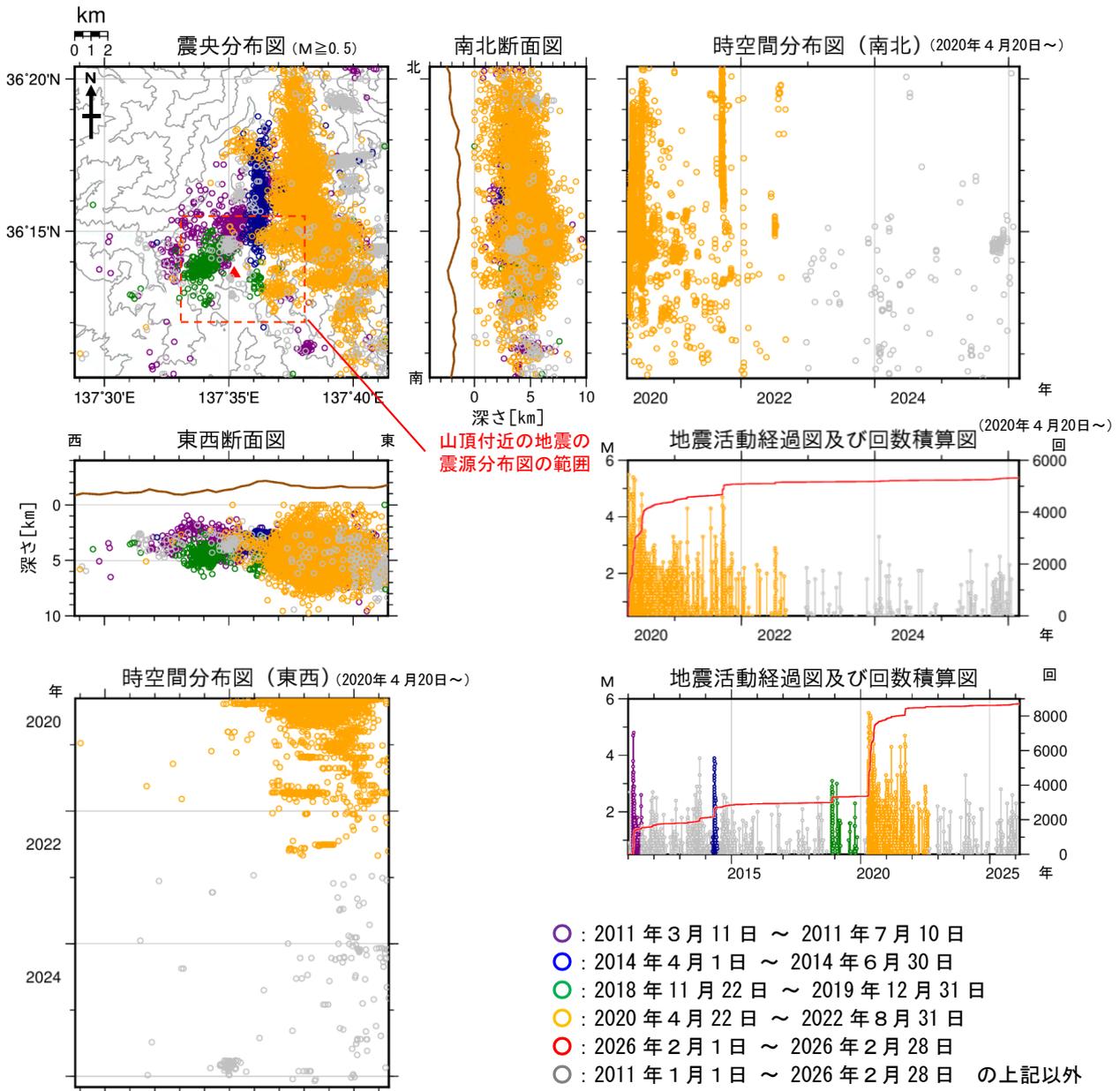


図10 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日～2026年2月28日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数（右軸）を示しています。

震央分布図中の赤破線領域は、図2で示す領域に対応しています。

- ・ 焼岳周辺では、2011年（紫丸）、2014年（青丸）、2018年から2019年にかけて（緑丸）、2020年4月から2022年8月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
- ・ 今期間、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

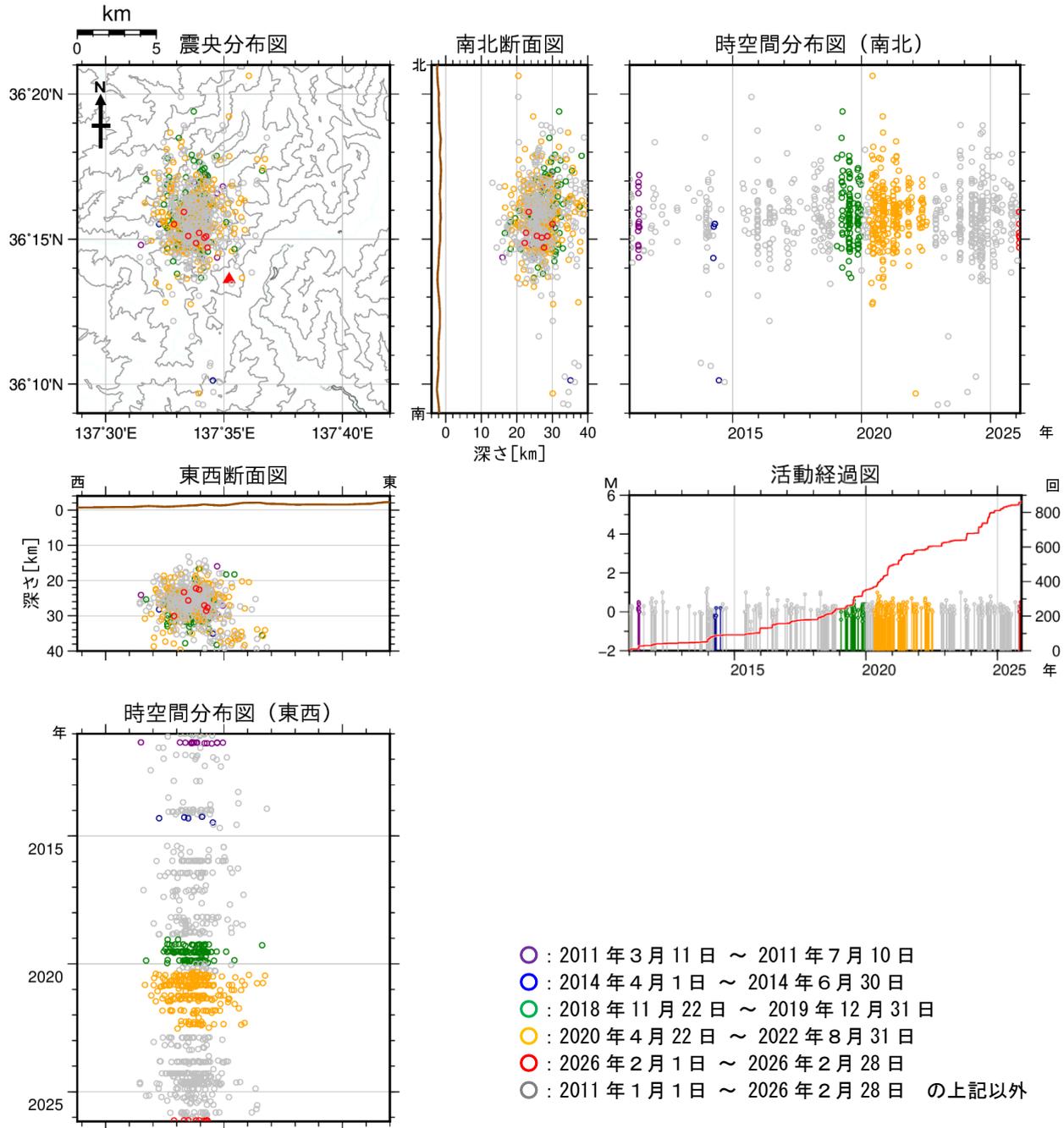
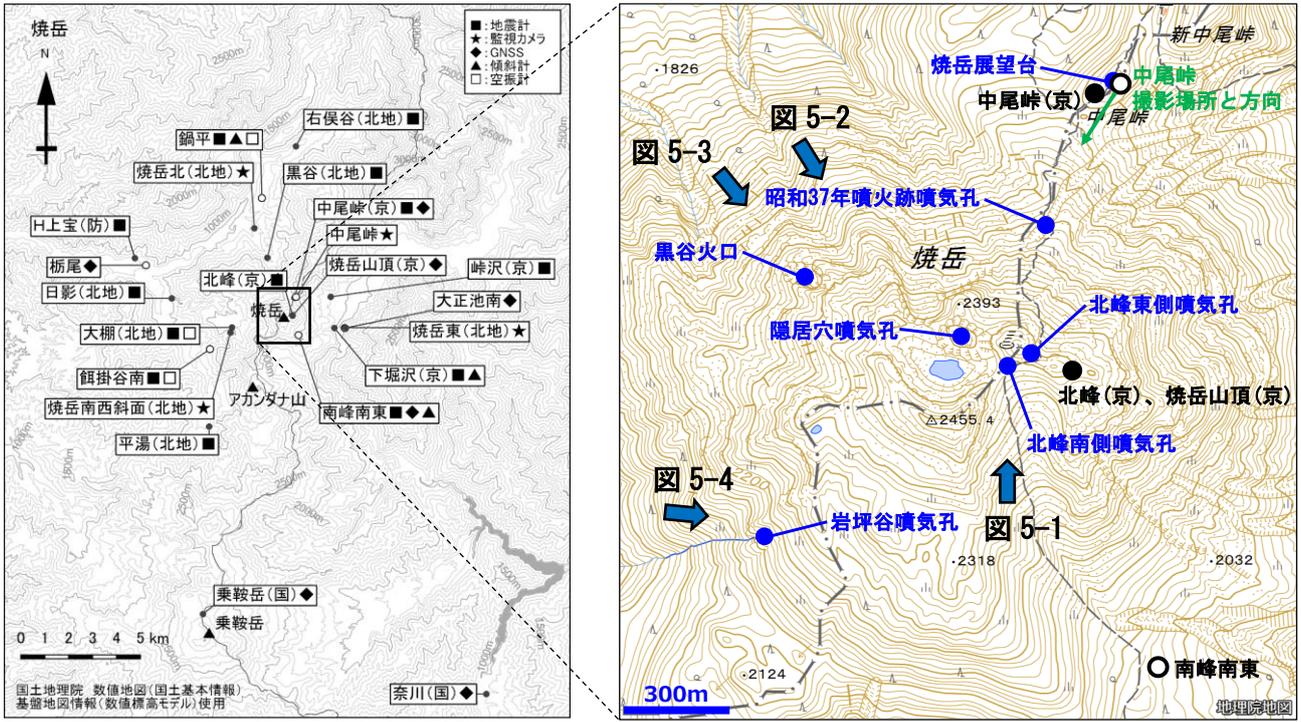


図11 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2026年2月28日）  
 広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。  
 M（マグニチュード）は地震の規模を表します。  
 図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・ 焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化はみられません。
- ・ 過去には、図10に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加したことがあります。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。  
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図12 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置と図5の撮影方向  
 右図中の緑矢印は図4の撮影位置と方向を、また青矢印は図5の撮影方向を示します。